

匹見町埋蔵文化財調査報告書第37集

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書 XIV

2002年3月

島根県匹見町教育委員会

匹見町埋蔵文化財調査報告書第37集

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書 XIV

2002年3月

島根県匹見町教育委員会

序 文

本書は、開発行為等に先掛けて事前に埋蔵文化財の有無、つまり過去における人間の営みの痕跡を探り、その結果を報告したものです。

こうした考古学による過去への追求は、歴史を明らかにすることのみに止まらず、現在の我われの生活のあり方や、未来を創造するための大切な資料であることを認識する必要があろうと考えております。

教育委員会としては前述の趣旨に基づき、毎年1冊の割で刊行して本書で14号に至っておりますが、今日まで本町の歴史の古さや、また不透明な空間期間を埋めるなど、多くの実績ある発見がなされてきたことは、皆様方も周知のとおりと存じております。

さて本報告のとおり、今回は主に2地点について調査されたようですが、けっして特筆すべき発見はなかったものの、こうした地味で緻密な調査を継続することによって、いずれ我われの創造するに余りある資料の発見があると信じている次第であります。勿論、こうした文化財をロマニズムのみに捉えるべきものではなく、文化財保護法の1条でいう「…その活用を図り、もって国民の文化的向上に資する…」という主旨のもとに保護に当たってゆかなければならぬと考えている次第であります。

末尾になりましたが、寒暑の中での作業された皆さん、そして県教育委員会の担当職員の方、ご指導いただいた山口大学の中村友博教授、また島根大学の山田康弘助教授などのお世話になった方がたにお礼を申し上げ、以上もって序文といたします。

平成14年3月1日

匹見町教育委員会

教育長 松 本 隆 敏

例　　言

1. 本書は、平成13年度国庫補助事業として、匹見町教育委員会が行った町内遺跡詳細分布調査の報告書である。

2. 調査は、島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て、次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会			
調査員	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺 友千代		
	匹見町教育委員会主任主事	山本 浩之		
調査補助員	匹見町埋蔵文化財調査室	栗田 美文		
	（臨雇）	大賀 幸恵	大谷 真弓	
調査協力		斎藤 美代子	渡辺 暁	
調査指導	島根県教育委員会文化財課			
	山口大学人文学部教授	中村 友博		
	広島県立美術館学芸課長	村上 勇		
	島根大学法文学部助教授	山田 康弘		
事務局	匹見町教育委員会教育長	松本 隆敏		
	匹見町教育委員会次長	大谷 良樹		
	匹見町教育委員会主任主事	山本 浩之		
発掘作業員	栗田 修 斎藤 幸夫 森脇 雅大	長谷川時子	大館 高義	

3. 調査に際しては、土地所有者をはじめとして、地元の方々に終始多大なご協力をいただきとともに、また工事主体者側の各担当者にもご協力をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

4. 本書に記載した配図は縮尺1/1000のもので、美濃郡匹見町土地改良区のご協力を得、また調査地点図は(株)ワールド航測コンサルタントが調整した縮尺1/25000を使用したものである。

5. 今回の調査は、調査地点名は全て小字名をもって称することにし、また遺物・遺構の有無にかかわらず、「遺跡」という文語は用いずに、全て「地点」という文語を末尾に附して称することにした。なお、今回は末頁に袋封とした「匹見町遺跡地図」をとくに添付することにした。

6. 資料作成等は、栗田美文・大賀幸恵・大谷真弓・渡辺暁氏らの協力を得、執筆は渡辺友千代・山本浩之（章末に示す）が各担当し、編集は執筆した2人で行ったものである。

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	(渡辺友千代)	1
第1節 調査に至る経緯と経過.....		1
第2節 その他の調査について.....		1
第2章 2地点の調査概要	(山本 浩之)	2
第1節 家ノ背戸地点.....		2
1. 調査地点の位置と地域概観.....		2
2. 調査の概要.....		2
(1) 調査区の選定と設定		2
(2) 層序と各調査区の状況		2
3. 出土遺物.....		5
(1) はじめに		5
(2) 実測遺物		5
第2節 長尾原地点.....		6
1. 調査地点の位置と地域概観.....		6
2. 調査の概要.....		7
(1) 調査区の選定と設定		7
(2) 層序と各調査区の状況		8
3. 出土遺物.....		11
(1) はじめに		11
(2) 実測遺物		11
第3章 その他の分布調査状況	(渡辺友千代)	13
第1節 中塚地点.....		13
第2節 森ヶ溢（もりがえき）地点.....		13
第3節 神原地点と他の状況.....		14
1. 神原地点		14
2. その他		14

匹見町遺跡地図

挿図・図表目次

第1図 調査地点位置図	1
第2図 調査地点と周辺の遺跡(1)	2
第3図 家ノ背戸地点 配置図	3
第4図 家ノ背戸地点 上層図	4
第5図 家ノ背戸地点 出土遺物実測図	6
第6図 調査地点と周辺の遺跡(2)	7
第7図 長尾原地点 配置図	8
第8図 長尾原地点 上層図	9
第9図 遺構状況図(A調査区・3層上位部)	10
第10図 長尾原地点 出土遺物実測図	12
第11図 中塚地点 位置図	13
第12図 中塚地点 土層図	13
第13図 森ヶ溢地点 位置図	14
第14図 神原地点 位置図	14
第1表 家ノ背戸地点 出土遺物集計表	5
第2表 長尾原地点 遺構計測表・出土遺物集計表	11

図 版 目 次

図版1 家ノ背戸地点

1. 南からみた家ノ背戸地点の遠景
2. 発掘作業風景

図版2 家ノ背戸地点

1. A調査区の完掘状況（北東から）
2. B調査区の完掘状況（北西から）

図版3 家ノ背戸地点

1. C調査区の完掘状況（北東から）
2. 家ノ背戸地点の出土遺物

図版4 長尾原地点

1. 北からみた長尾原地点の遠景
2. SK01に陥入する立石状況（A調査区）

図版5 長尾原地点

1. SK02に陥入する集石状況（A調査区）
2. A調査区の完掘状況（北西から）

図版6 長尾原地点

1. B調査区の足錆出土状況
2. B調査区の縄文土器出土状況

図版7 長尾原地点

1. B調査区の完掘状況（北西から）
2. 長尾原地点の出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

本年度における試掘調査は3地点で実施し、つまり本報告書のとおり「中塚」「家ノ背戸」「長尾原」と呼称する地点である。

このうち中塚地点としたものは、島根県益田土木建築事務所から提出された益土第1199号（平成13年度8月21日付）によって発生したもので、これは町道内谷線（石谷工区）の道路改良工事に伴って試掘調査を行ったものである。ただし本地点は、2調査区を設定して実施したもの、いずれとも文化層と捉えることはできなかったのであった（第3章）。

つぎの家ノ背戸地点は、同じく島根県益田土木建築事務所から提出されたものであり、本件は県道匹見左鎧線（野川工区）の道路改良工事に伴い実施したものであった。

本地点では数点の弥生土器や、また数10点におよぶ近世以降と想定できる陶磁器類が出土した。しかしながら本報告とおり、調査区によっては擾乱を呈した様相もみられ、整合性を欠く部分も捉えられたのであった。

そして長尾原地点における試掘調査は、益田農林振興センターが工事主体で行う「益美地区県営中山間地域総合整備事業」に伴い実施したもので、当地点域に2m方形区を3箇所設定して行ったものである。実施した結果、数点の縄文土器および中世遺物が出土しており、一方では遺構も検出していることから、当域には良好な遺跡が存在していることが想定されたのである。

以上が試掘調査によって明らかになったものであるが、中塚地点を除く、家ノ背戸・長尾原地区においては文化的な包含層が確認されたことから、次年度における開発行為に伴い本調査が必要になり、工事主体者側との協議を行う予定としている。

第2節 その他の調査について

本年度においては試掘調査以外に、「工事立会い」「踏査」等の分布調査については第3章で概要しているが、その他に「国道488号澄川バイパス改良工事」や「町道内谷線における道路付替え工事」に伴う踏査による分布調査を実施している。とくに木貢に袋封しているとおり、同年度においては町内の「遺跡地図」の作成のために相当の日数を費やしており、他の本格調査の間を縫って忙殺の日々であったことは言うまでもなかったのである。

（渡辺友千代）

第2章 2地点の調査概要

第1節 家ノ背戸地点

1. 調査地点の位置と地域概観

本地点は、鳥根県美濃郡匹見町大字紙祖イ944-6番地ほかに所在し、そこは小字名でいう「家ノ背戸」といわれる場所で、その地点名をもって称名した（第2図・図版1-1）。



第2図 調査地点と周辺の遺跡（1）

該地は、紙祖川と凡そ10mの比高差を測る河岸段丘に立地し、そこは標高288~292mを測って、畑地と化されている谷平地である。その西側には山地がせまり、山裾には県道匹見・左鎌線が貫道して数点の民家を散見できるとともに、また東側との河川間は、約50mを測り、狹小な水田地を形成するといった地形を呈している。

一方、該地には数多く

の周知の遺跡を確認することができる。例えば同河岸では、1キロ上流には磨製石斧の確認されたフリ付下タ遺跡、中・近世の陶磁器類を中心に出土した森ノ前遺跡、至近には中世前半の墓と思われる森ヶ溢集積墓、そして下流域では縄文後晩期の遺物が出土した前田遺跡、近世の役所跡である屋敷田遺跡などがある。また対岸には、中世期の山城跡である小松尾城跡、そして縄文中～後期の遺物・遺構を伴う石ヶ坪遺跡などが存在している。このように縄文から中・近世に渡る各期の遺跡状況からは、紙祖川のつくった本河岸段丘は、古くから最良の生活域であったものだろうと想像される。

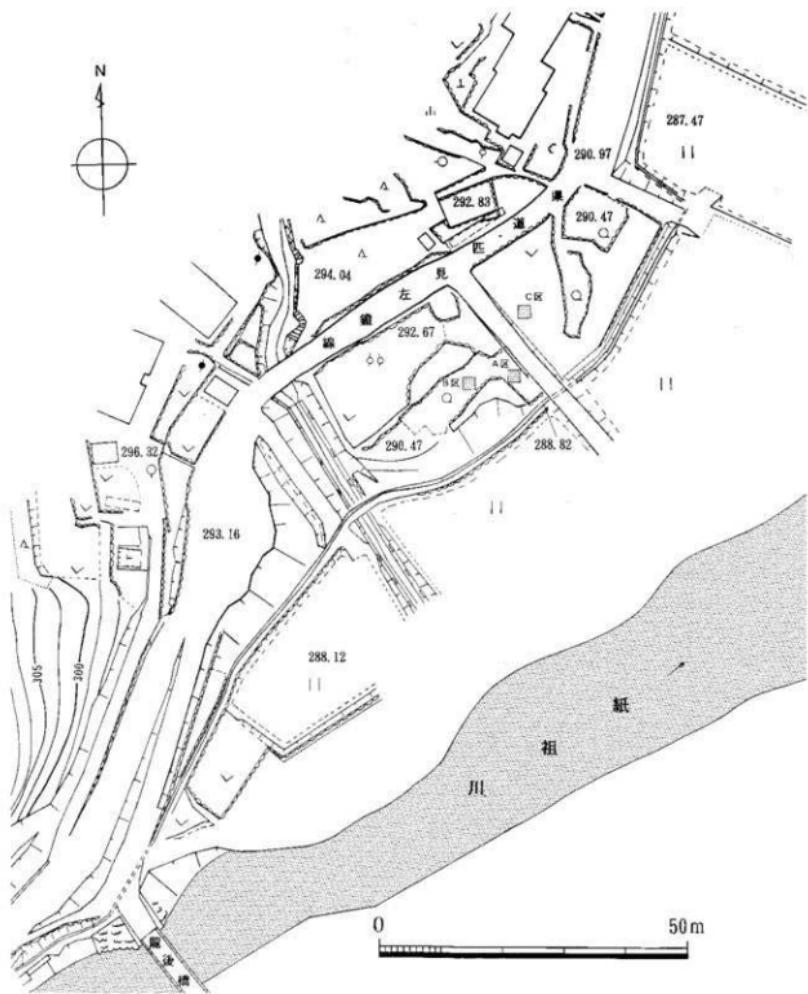
2. 調査の概要

（1）調査区の選定と設定

調査区の設定にあたっては、小谷の流下する山裾附近の、県道匹見・左鎌線沿いとなる畑地を対象としたもので、2mの方形区をもって任意に3箇所ほど設定し、その設定順位および調査順位にしたがって、それぞれA調査区・B調査区・C調査区と名称することにしたのである（第3図）。

（2）層序と各調査区の状況

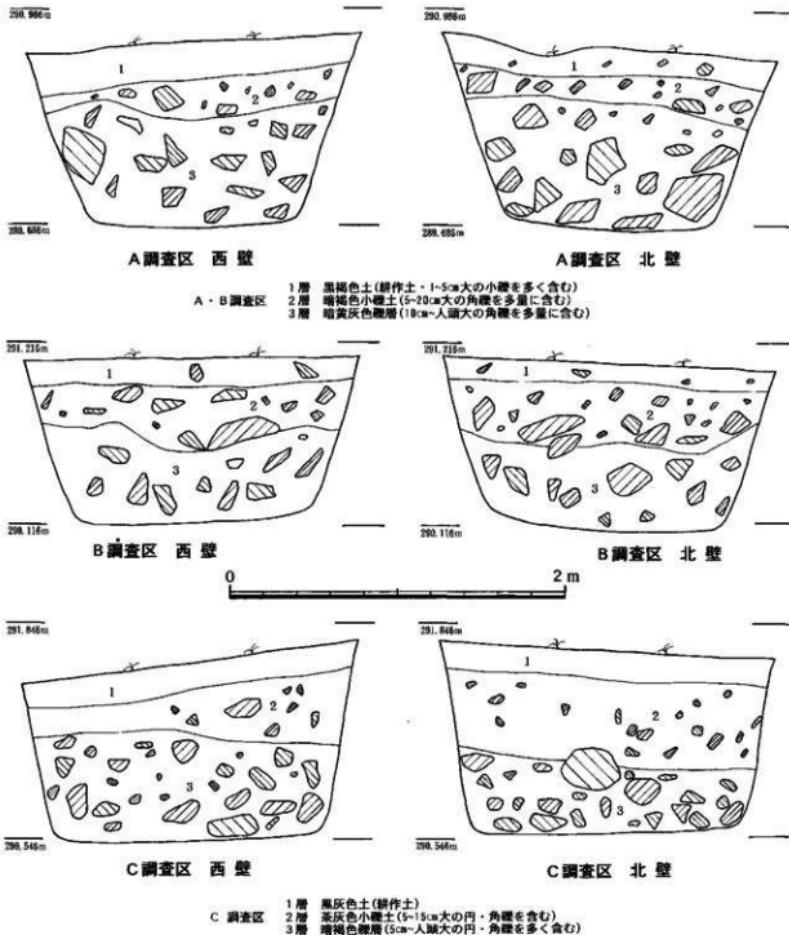
A調査区は地点域の東側に設定したもので、その層序は近接するB調査区とも同様に1層の黒褐色



第3図 家ノ背戸地点 配置図

土(耕作土), 2層の暗褐色小礫上, 3層の暗黄灰色礫層の順で堆積していた(第4図・図版2-1～2)。

このうちA調査区の層位堆積状況はB調査区と比べると, 2層の暗褐色小礫上の層厚は10~30cmを測って薄く堆積していたが, 逆に3層とする暗黄灰色礫層は60~80cmと厚く堆積する状況であった。また人為層とする1層を除いて, 2層は5~20cm大の角礫, 3層は10cm~人頭大の角礫を多量に含ん



第4図 家ノ背戸地点 土層図

であり、下位層に向かうにしたがって礫が充填しているという傾向を窺うことができた。おそらくは小谷の氾濫等によるものと想像できたのである。なお出土物は、1層から近世期以降の陶磁器類が出土している（第1表）が、それ以外の層序では遺構はもちろんのこと、遺物は皆無であった。

B調査区はA調査区と同様の層序をなすものの、2層の層厚は30~50cmを測って厚く、逆に3層は50~60cmを測って薄く堆積するなど、A調査区と比べて堆積状況に若干の差異がみられたのである。

なお出土物もA調査区と同様に、1層から近世期以降の陶磁器類が3点出土したのみで、遺構は確認できなかったのである（第1表）。

一方、C調査区は地点域の北側に位置し、A調査区とは農道を挟んで近接しているものの、堆積状況は他調査区とは異なっており、その層序は1層の黒灰色土（耕作上）、2層の茶灰色小礫土（5～15cm大的円・角礫を含む）、3層の暗褐色礫層（5cm～人頭大の円・角礫を多く含む）の順で堆積していた（第4図・図版3-1）。このうち1層は20cm前後を測る層厚で、南西方向に傾斜を成していた。また2層の層厚は、北壁面においては60cm前後と、ほぼ一定で水平を保っているものの、西壁面における最小厚は20cmであり、層厚差の著しいものであった。そして3層は、南西から北東方向にかけて傾斜するといった層位状況を呈するもので、また層中に含まれる円・角礫は比較的大型のものが多く、やや隙間をもって堆積する状況を確認することができたのである。

本調査区における遺物の出土は、1層からは陶磁器を中心として33点、2層からは陶磁器類27点・弥生土器4点・銭貨1点を含む33点、3層からは陶磁器類のみ9点の出土遺物を確認できたのであった。なかでも弥生土器が3層からではなく、上位の2層から出土したことは、層位の逆転現象とも捉えられて攪乱的な層序状況を呈していると考えられたのである（第1表・第5図・図版3-1～2）。なお遺構は確認されていない。

3. 出土遺物

(1) はじめに

本地点では、67点の陶磁器、4点の弥生土器、1点の瓦器、1点の銭貨、6点の金属器、1点の瓦、1点のガラスなどが出土してお

区名	層名	弥生土器	瓦器類	陶磁器類	金屬器類	銭貨	瓦	ガラス	他上	計
A調査区	1層			3						3
B調査区	1層			3						3
C調査区	1層			25	6	1	1	少量	33	
	2層	4	1	27	1	1		1	33	
	3層			9						9
計		4	1	67	6	1	1	1	—	81

第1表 家ノ背戸地点 出土遺物集計表

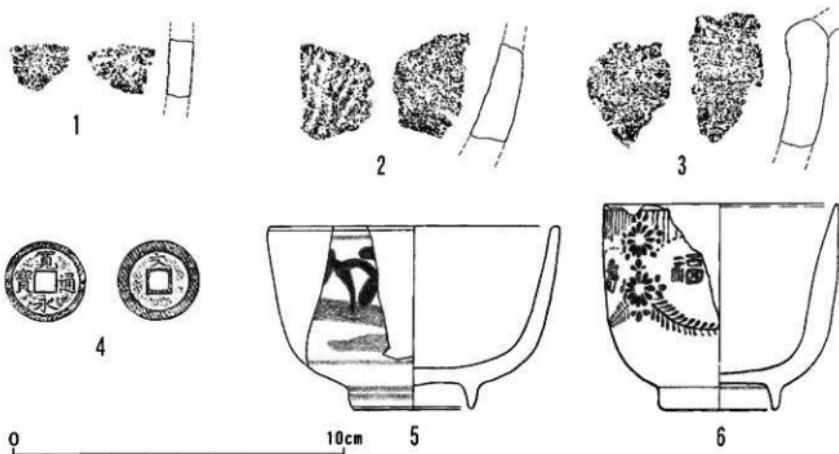
り、そのほとんどはC調査

区からの出土物に集中していた（第1表）。したがってC調査区の出土物から特徴的な遺物を採り上げ、以下若干の説明をしておくことにする。

(2) 実測遺物（第5図・図版3-2）

弥生土器 1～3は弥生土器片で、いずれも2層の茶褐色小礫土に出土したものである。このうち1は、内外面ともナデ調整で、器肉は7mm測って薄手。胎上には砂粒を含み、色調は灰褐色を呈する。2は胴部片で、その色調は外面は橙灰色、内面は暗褐色を呈する。内外ともナデ調整で、外面には櫛描文を施しており、器肉は最大で1cmを測る。胎土中に雲母片を少量含み、焼成は良好で、おそらく中期のものだろう。3は、壺の頸部で、内外ともナデで仕上げられている。体部はゆるやかに内反して立ちあがり、器肉は1cmを測っている。また胎土中には、砂粒および雲母片を含んでおり、焼成は堅緻で、色調は橙灰色を呈している。

銭貨 4は、2層から出土した一文錢で、材質は銅製のもの。径は2.5cm、厚さは0.1cm、そして重さは3.1gを測り、中ほどの孔部は0.6cm四方の方形をしている。寛永通宝と文字のあるその銭貨は、一般的に古寛永錢と新寛永錢とに大別されるもので、寛永8年（1668）を境として、前者は寛永3年



第5図 家ノ背戸地点 出土遺物実測図

(1626)からの約40年間、また後者は明治2年(1869)迄の約200年間におよぶ期間に鋳造されたものである。本出土分は、その後者に属するもので、江戸期の庶民の銭として使用されたものだろう。

陶磁器類 5・6は、いずれも碗の底部で、近世以降に作られた国産品である。このうち5は、3層の暗褐色疊層から出土したもので、高台径およそ3.7cm、口径およそ8.7cm、器高5.6cmを測るものである。外面には濃い具須による染付けが施されており、また胎土は堅緻で、その色調は灰色を呈し、地元産の白上焼と思われる。そして6は2層から出土したもので、外面には印判手か、もしくはスタンプによる文様付けが施されている。高台径3.3cm、口径およそ7cm、器高さ6.3cmを測り、胎土は堅緻で灰白色を呈している。また器厚は、胴部辺りがやや厚く、腰部にかけてやや薄くなるといった作りである。

第2節 長尾原地点

1. 調査地点の位置と地域概観

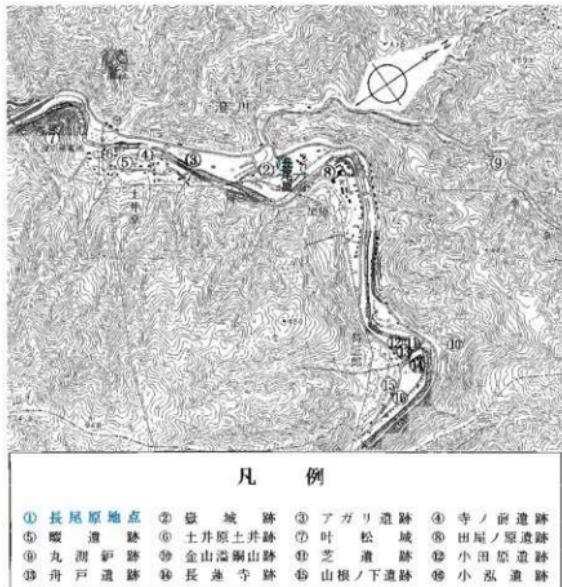
本地点は、島根県美濃郡匹見町大字澄川イ797内3番地ほかに所在し、そこは小字名でいう「家ノ彌り」といわれる場所である。ただし、地点域は「長尾原」といわれていることから、遺跡名においてはその通称をもって称名したのである(第6図・図版4-1)。

該地は、北西流する匹見川の右岸に形成された北東一南西方向約1000m、北西一南東方向最大約300mを測る三日月状をなした河岸段丘において、そのやや上流域に位置するもので、西側には山地がせまり、その山裾には国道488号線が北東一南西方向へと貫通しているとともに、東側約100m地点には河川が流下するといった立地状況を呈している。そこは、川側に向かって派生する数段の段丘面を形成しており、また山裾を周流する旧河道跡を遺している場所で、本地点は、現在では1段高く

なっており、おそらくは中州状に形成されたと思われる砂質性の水田地に標高160m、河川との比高差約10mをもって位置しているのである。

一方、該地周辺には昨近の発掘調査の成果も含めて、数多くの遺跡の存在が明らかになってきている。例えば、同河岸では、本地点を見おろすすぐ近くに城跡があり、これは下流に約1.3km下った叶松城跡の支城といわれる中世の山城跡である。また縄文遺物の出土したアガリ遺跡があり、その対岸には縄文中期の土器が出土した寺ノ前遺跡、

弥生～中世の礎遺跡の存在を窺うことができる。そして本地点から至近となる対岸の良好な段丘面には、縄文中期の遺物を伴う川原ノ原遺跡や、さらに上流1.2km先の地点城には、縄文および南北朝期の山根ノ下遺跡、縄文前期土器出土の舟戸遺跡、縄文中期土器出土の金山濱洞山跡、縄文後期土器出土の芝遺跡、縄文・弥生遺物出土の小弘遺跡などの数多くの縄文～中・近世期の遺跡を確認することができる。このように各期に渡る遺跡の分布状況からは、匹見川のつくった本河岸段丘は、本地域（澄川地区）においても、古くからの最良の生活域であったことを想像できるのである。



第6図 調査地点と周辺の遺跡(2)

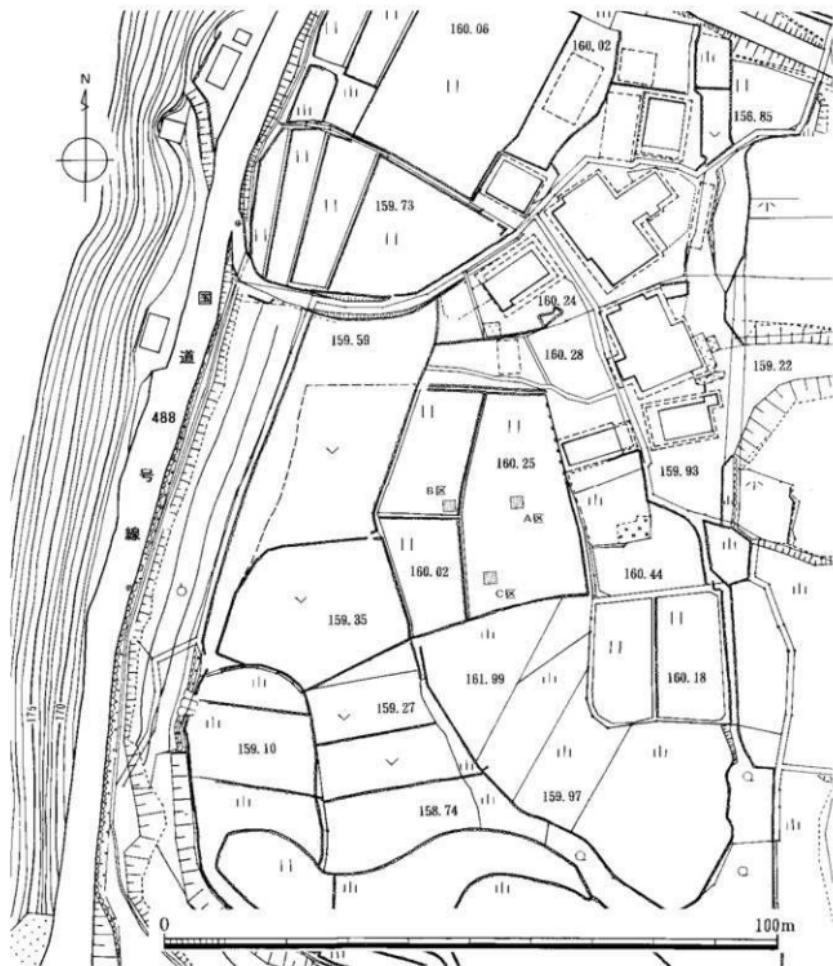


発掘作業風景

2. 調査の概要

(1) 調査区の選定と設定

調査区は2mの方形区のものとし、地形的立地を考えて任意にA調査区という1区のものを設けることから始めることにした。そして掘削の段階で、A調査区に遺物および遺構が検出されたので、該区の西側に1区、南側に1区を増設して、その地区名は逆時計まわりにB調査区・C調査区とアルファベットを冠して

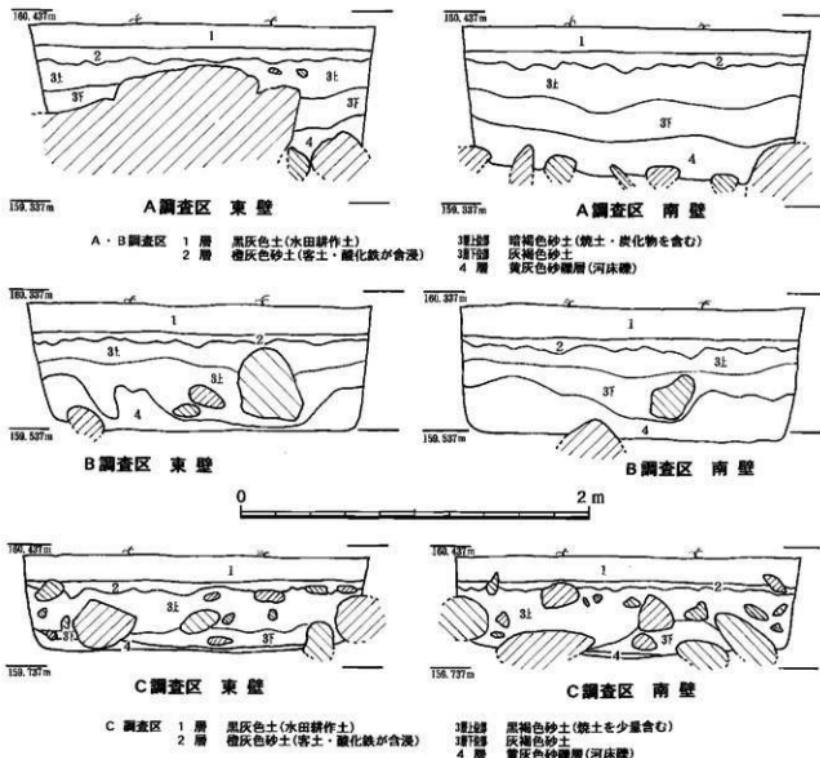


第7図 長尾原地点 配置図

呼称することにしたのである（第7図）。

(2) 層序と各調査区の状況

本地点域における基本的層序は、A調査区・B調査区においては同様のものであり、それは1層の黒灰色土（水田耕作土）、2層の橙灰色砂土（客土）、3層の暗褐色～灰褐色砂土（上位部・下位部に分層）、そして4層の黄灰色砂疊層（河床礫）の順で堆積していた（第8図・図版5-2・7-1）。そしてC調査区は他区と較べ3層に若干の色調および堆積状況に差がみられたもので、その基本的層



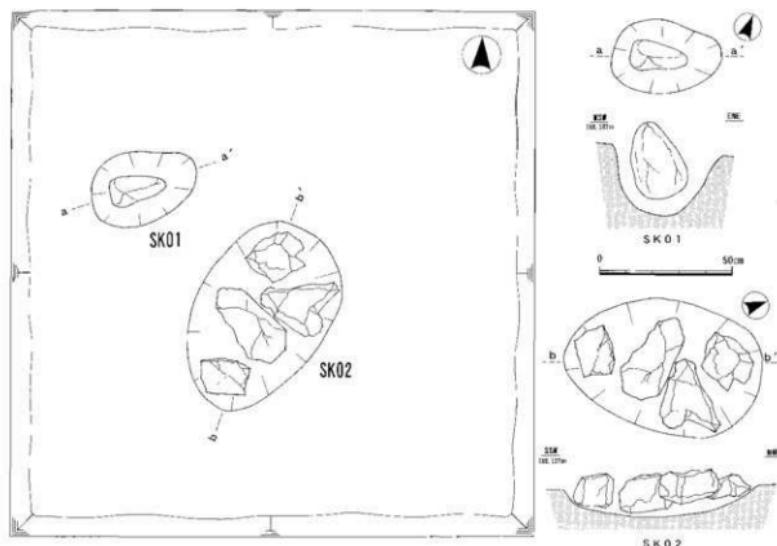
第8図 長尾原地点 土層図

序は、1層の黒灰色土（水川耕作土）、2層の橙灰色砂土（客土）、3層の黒褐色～灰褐色砂土（上位部・下位部に分層）、そして4層の黄灰色砂礫層（河床礫）の順で堆積していたのである。また全調査区における3層の分層については、その上位部と下位部との色調差は乏しく判り難いものであり、遺物の出土状況等も考慮して判別したものであった。このように、全体的な層序状況は、1層の水川耕作土以外には砂土あるいは砂礫で堆積しており、そこには河端もしくは河道で生成された立地性を読みとることができたのである。

このうちA調査区の層位堆積状況は、1層黒灰色土の層厚は10～15cm、酸化鉄の含浸する2層の橙灰色砂土は10cm前後、3層上位部の暗褐色砂土は20～30cm、下位部の灰褐色砂土は15～20cm、そして4層の黄灰色砂礫層は20～30cmを測っているので、その2層は焼土を多量に含み、そして3層の上位部は焼土および炭化物を少量含んでおり、4層は10～60cm大の円礫を多く含んでいるといった状況を呈していた。

なお本区は遺構の検出された唯一の調査区で、それらは3層の上位部に2基ほど確認されたもので（第9図・図版4-2・5-1・第2表），その遺構の坑界および坑壁は砂性ということもあり、色調差は貧弱かつ不明瞭であったため、部分的に周囲を切り崩して実測に及んだものであった。そのなかで盤状の立石を伴うものをSK01、角礫の集石状のものをSK02と称名することとし、いずれも坑内には焼土および炭化物を含む黒褐色砂土の陥入がみられたもので、その土坑の性格は不明であった。

出土遺物については、1層から陶磁器類を3点、2層から瓦質土器1点、陶磁器類8点、3層の上位部からは上師器1点・錢貨1点、そしてその下位部からは縄文土器1点・弥生土器1点をそれぞれ確認している（第10図・第2表・図版7-2）。



第9図 遺構状況図（A調査区・3層上位部）

B調査区の層位堆積状況は、多少の層厚差はあってもA調査区と類似するものであり、ただし、層位の2層は焼土を伴わず、また4層は波状に堆積するといった状況を呈している点が異なる。

遺物の出上は、1層・3層を中心として陶磁器類のほかに、3層上位部からは足錆1点（図版6-1）、土師器1点・瓦質土器3点、およびその下位部からは石器剥片1点・縄文土器3点（図版6-2）をそれぞれ確認できたのである（第10図・第2表・図版7-2）。

C調査区の層位堆積状況は、他調査区と較べてやや異なり、とくに河床礫とみられる円礫は高位の層位から表出している状況を窺えたもので、3層の層位中に10~30cm大、4層中は20~60cm大の円礫を多く含み、また黒褐色砂土とする3層上位部と灰褐色砂土とする3層下位部との層厚差がやや異なる点である。つまり前者は20~30cmの層厚を測り、10~20cmを測る後者に対して、やや厚く堆積して

いるといった状況を呈している。なお遺物は、1層・3層上位部から陶磁器などのはかに、3層下位部からは弥生土器が1点出土しているのである（第2表）。

区名	通構	口径(cm)	長径(cm)	深さ(cm)	検出面積(m)
A調査区	SK01	28	40.2	24.5	160.082
	SK02	50	75	12	160.022

区名	層名	青年十箇	石器剥片	縄文土器	土師器	瓦質土器	陶磁器類	足鍋	錢貨	焼上	炭化物	計
A調査区	1層					3						3
	2層				1	8				多量	少量	9
	3層上位部			1				1		少量	少量	2
	3層下位部	1										2
B調査区	1層					2						2
	3層上位部			1	3	2		1		少量	少數	7
	3層下位部	1	3			1	6					4
C調査区	1層					2				少量		7
	3層上位部											2
	3層下位部	1										1
	計	2	1	4	2	5	23	1	1	—	—	39

第2表 長尾原地点 遺構計測表・出土遺物集計表

3. 出土遺物

(1) はじめに

本地点では、23点の陶磁器をはじめ、石器剥片1点、繩文土器4点、弥生土器2点、瓦質土器5点、土師器2点、足鍋1点、錢貨1点などが出土している。一方、層別にみてみると、人為層とする1層を除いて、2層からは陶磁器8点、瓦質土器1点、3層上位部からは、陶磁器4点、瓦質土器3点、土師器2点、足鍋1点、錢貨1点、3層下位部からは、石器剥片1点、繩文土器4点、弥生土器2点などが出土している状況を窺える。このことから、水田造成時等に多少の削平等があったであろうことを考慮して、文化構築層は、2層～3層上位部までを中世期のもの、3層下位部を縄文～弥生期と想定してみた。なお、これらのなかから本地点を特徴付ける遺物を選定して、以下若干の説明をしてみたのである（第2表）。

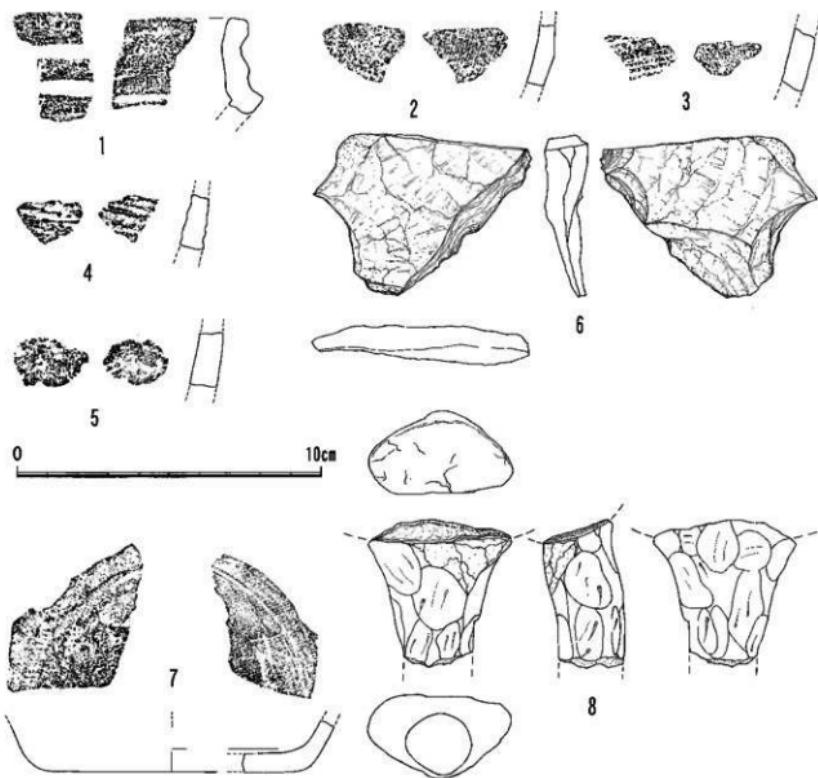
(2) 実測遺物（第10図・図版7-2）

縄文土器 1～4は、いずれも3層下位部の灰褐色砂上に出土した縄文土器片で、その出土はA調査区からの2以外はすべてB調査区からの出土であった。このうち1は内唇する口縁部で（図版6-2），外縁は凹線文が施されている。内外縁とも丁寧なナデ調整を施されて、口縁端部は平滑なつくりをもち、凹線文内部には巻貝による条線を看取できる。色調は暗褐色で、胎土巾には2～3mmの大砂粒を含み、縄文後期末に位置付けられるもの。2は両面ナデ調整で、色調は黒褐色を呈し、器肉は4mmを測って薄手なもの。3は外縁は条痕、内縁はナデ調整を施されるもので、また4は両面とも条痕を施されており、その内縁は一枚貝によるもので、いずれも色調は暗褐色を呈している。

弥生土器 5はA調査区の3層下位部から出土した弥生土器片で、両面ともナデ調整を施されるものの。器肉は5～7mmを測り、また色調は棕褐色で、胎土中に石英を含んでいる。

石器剥片 6は、B調査区の3層下位部から出土した石器剥片である。石材は頁岩質で、背・腹面とも腐化して灰色を呈する。加熱は側面からであり、部分的に刃部調整を施したところもみられる。

瓦質土器 7・8はB調査区から出土した瓦質土器で、いずれも暗褐色砂土の3層上位部からのも



第10図 長尾原地点 出土遺物実測図

のである。このうち7は上鍋の底部で、ロクロで成形されたもの。表面には炭素が付着して黒灰色を呈し、内外面には指圧によるナデ調整の痕跡を観察できるもので、器内の厚みは4~5mmを測っている。そして8は足鍋の脚部である(図版6-1)。外面は炭素が付着して黒灰色を呈し、その胎上の色調は灰色で、1~3mm大的砂粒を多く含んでいるものである。体部は僅かに内折しており、また表面には指頭による圧痕も観察できて、おそらくは15~16C頃のものであろう。

(山本 浩之)

第3章 その他の分布調査状況

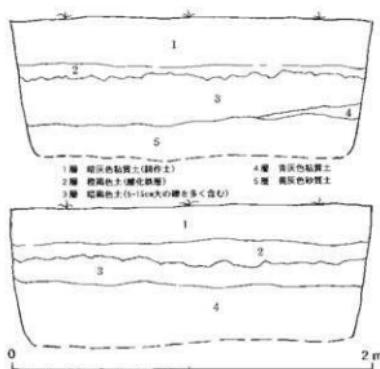
第1節 中塚地点

本調査地点は、島根県美濃郡匹見町大字石谷口69番地ほかに所在し、本件は町道内谷線（石谷工区）道路改良工事に伴い実施したのもである。その「中塚」と呼ばれている地点は、北流する石谷川に北東流した清谷川が相会し、僅かな谷平地を形成している場所であった（第11図）。

工事予定地に、任意に2mの方形のものを2区設定して実施した（写真1）。層序は1層の暗灰色粘質土、2層の橙褐色土、3層の暗褐色土、4層の青灰色粘質土、5層の黄灰色砂質土と凡そ80cmを測って堆積していた（第12図）が、いずれの層序とも遺物はなく、文化層といえるものは捉えることができなかったのである。

第2節 森ヶ溢（もりがえき）地点

本地点は、島根県美濃郡匹見町大字紙祖1740番地ほかに所在（第13図）し、本件は県道匹見左鏡線（野田工区）道路改良工事に伴って協議したものである。



第12図 中塚地点 土層図



第11図 中塚地点 位置図



写真1 B調査区発掘風景

島根県益田土木建築事務所から提出された益土第1199号（平成13年8月21日付）によって、上述の現地を同年9月に2回にわたって踏査した結果、地元でいう「グロ」が1基発見されたのである。そのグロといわれるものは、20~50cm大の自然石を集め積み上げられたもので、高さ0.9m、径は1.7~2.2mを測る饅頭形をしたものであった（写真2）。

本遺構が墓跡、あるいは供養塔、または祭祀に伴うものかは判らないが、いずれにしても人為によって構築されたものであったことには間違いないと考えられるので、平成14年度において本格調査を実施する予定としている。



第13図 森ヶ溢地点 位置図



第14図 神原地点 位置図



写真2 中世墓と思われる積石のもの



写真3 「工事立合」による調査風景

第3節 神原地点と他の状況

1. 神原地点

本調査地点は、島根県美濃郡四見町大字四見イ770-1番地ほかに所在（第14図）し、本件は町道神原線の道路改良工事に伴い、協議したものである。

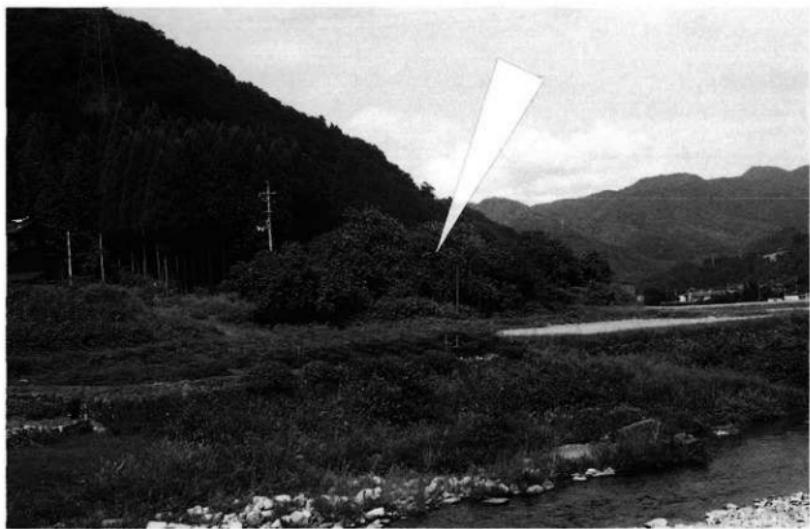
同工事は、既成道路に片側約1.5m、長さ20mにわたって拡幅されるものであったが、近隣に周知の遺跡がみられないことから、「工事立会い」の調査に止めて実施したのであった（写真3）。その結果、埋蔵文化財に値するものは得ることはできなかったのである。

2. その他

平成13年度において、その他に県道六日市四見線（笠山工区）の改良工事、町道戸村線や岡本線の改良工事に伴う協議が実施されたが、いずれも近隣に周知の遺跡がみられないこと、また立地的にみても、その可能性が薄いと判断し、踏査のみとして試掘は行わなかったのである。

（渡辺友千代）

図版 1 家ノ背戸地点



1. 南からみた家ノ背戸地点の遠景



2. 発掘作業風景

図版2 家ノ背戸地点



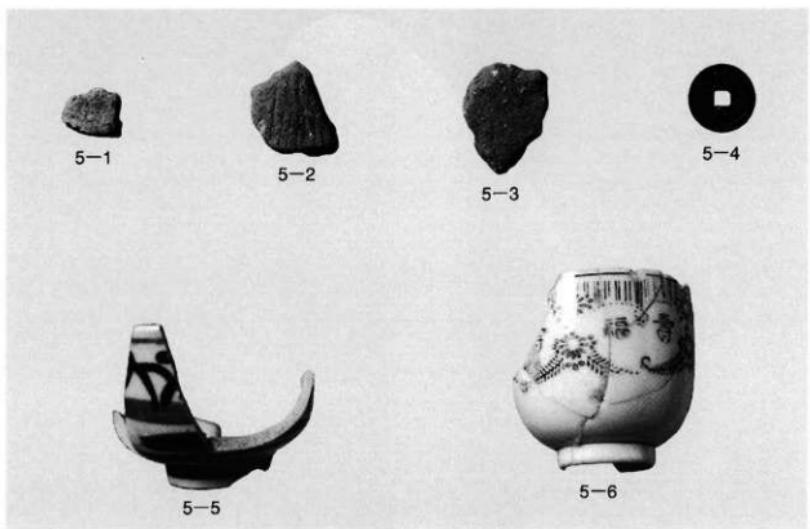
1. A調査区の完掘状況（北東から）



2. B調査区の完掘状況（北西から）



1. C調査区の完掘状況（北東から）



2. 家ノ背戸地点の出土遺物

図版 4 長尾原地点



1. 北からみた長尾原地点の遠景



2. SK01に陥入する立石状況（A調査区）

図版 5 長尾原地点



1. SK02に陥入する集石状況（A調査区）



2. A調査区の完掘状況（北西から）

図版 6 長尾原地点



1. B 調査区の足鏡出土状況

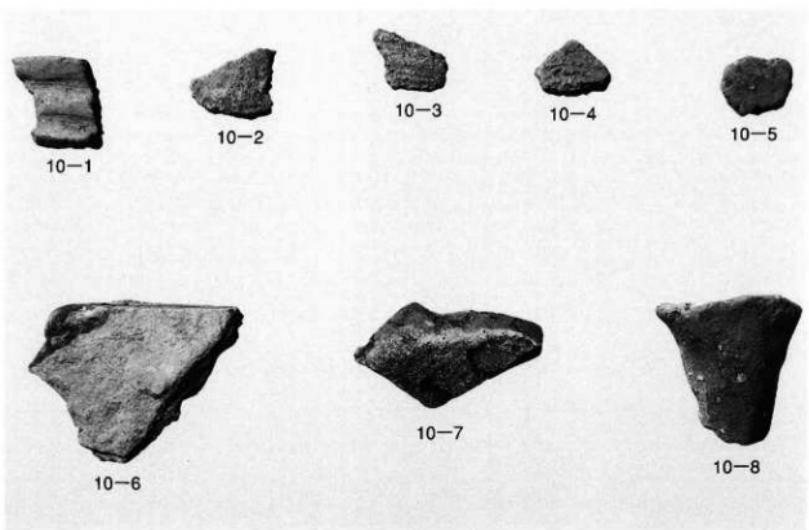


2. B 調査区の縄文土器出土状況

図版 7 長尾原地点



1. B調査区の完掘状況（北西から）



2. 長尾原地点の出土遺物

平成14年3月8日 印刷
平成14年3月14日 発行

匹見町埋蔵文化財調査報告書第37集

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書XIV

発行 匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町大字匹見41260

印刷 株式会社 谷口印刷
島根県松江市東長江町902-59

匹見町遺跡地図

